

日本書道史

(25)

前田 龍雲

裝飾経の盛行

久能寺経

久能寺経は平安時代に制作された裝飾経の代表作。『法華経』八卷（二十八品）に開結の二経を加えた三十巻を一人一巻ずつ分担して書写したものを一品経とよぶ。そのもつとも古くかつ比較的完全な形で残っているのが久能寺経である。もと静岡県の久能寺（現在の鉄舟寺に改名）に伝わったので、この名がある。鉄舟寺に十九巻（国宝）が現存、ほかは東京国立博物館などに分蔵される。各巻の巻末



久能寺経

に結縁者名が記されており、永治一年（一一四一年）鳥羽院、待賢門院、美福門院らを中心とする宮廷の人々によって供養されたものと考えられる。大和絵の描かれた見返し、金銀の切箔をまいた料

紙は、王朝貴族の美意識を反映する華麗なものである。「譬喩品第三」の筆者は藤原定信である。なお、藤原定信は一切経五〇四八巻を四十二歳から六十四歳までの二十三年間で完成させた。

平家納経

平家納経は、平安時代に平家の繁栄を願い、厳島神社に奉納された経典類の総称。法華経三〇巻、阿弥陀経一卷、般若心経一卷、平清盛自筆の願文一卷と、経箱・唐櫃からなる。經典に施された裝飾は絢爛豪華で、当時の平家繁栄を今に伝えていいる。平安時代の裝飾経の代表作で、当時の巧みな技を現代に伝える一級の史料である。

平家の一族、清盛・重盛・頼盛・教盛らがそれぞれ一巻を分担する形で經典



平家納経

を筆写した。長寛二年（一一六四年）に厳島神社に奉納されたが、各巻の奥書を参照すると、全体の完成には仁安二年（一一六七年）までかかったとされている。現在まで伝えられ、全点が昭和二十九年（一九五四年）、国宝に指定された。現在厳島神社が所蔵しており、模造品が厳島神社の宝物館で公開されている。

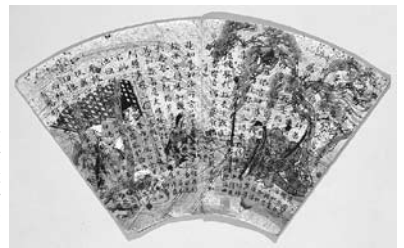
扇面法華経冊子

扇面法華経冊子（または扇面古写経）は、平安時代とくに院政期に流行した裝飾経のひとつであるが、扇形の料紙を使用し、濃彩の下絵を用いる点は他に類を見ない。

成立は十二世紀中頃。下絵の題材は、貴族や庶民の生活などから採られ、大和絵の手法で描かれている。美術品としての価値が非常に高く、当時愛玩された紙扇の絵の様式を伝える唯一の遺品でもある。書風は和様で数人の手になるものとみられ、書跡資料としても貴重である。風俗画としては、絵巻物とならび、様々な情報

が織り込まれた重要な図像資料でもある。夏扇の料紙を粘葉装の冊子に仕立てたもので、表紙には金字の経題のほか、十羅刹女を一体ずつ和装で描いている。

料紙はいずれも雲母を引き、墨流しや金銀の切箔、野毛、砂子などを散らし、そこに濃彩の優美な大和絵風俗画を下絵として描き、その上に経文を書写する。当時大量につくられた扇の地紙をそのまま写経用紙として転用した珍しい例である。豪華にして華麗な裝飾的效果に富んでおり、工芸史上も重要である。



扇面法華経冊子

を書く場合は、墨書の上を金泥でなぞったり、一字を半分ずつ金泥と墨とで書き分けたりするなど、手のこんだ書写がなされている。書風は和様であり、数人の手によるものとみられている。

扇面法華経冊子の成立は、「女人成仏」「写経成仏」を説く法華経信仰がさかんとするなかで、經典そのものも美しく飾りたてられるようになったことによるものとみられる。元来は「妙法蓮華経（法華経）」八巻と開結経二巻、すなわち、本経に先だって説かれる開経の「無量義経」と結びをなす結経の「観普賢経（仏説観普賢菩薩行法経）」を合わせて十帖で一具をなす。扇紙は総計百十五枚であったと推定される。一具のうち、今日では四天王寺（大阪市）に「法華経」巻一、六、七および開結経二帖の計五帖が伝存するほか、東京国立博物館が「法華経」巻八の完本一帖を所蔵、他に断簡五葉が各所に分蔵され、合計五十九面、表紙絵五面を数える。

経文は、一行十七字、一頁十二行（見開き二十四行）に定型化された書式に漢字で放射状に墨書されている。ただし、彩色下絵の青色や墨の部分の上に字

日本書道史

(26)

前田 龍雲

六、鎌倉時代



伝源頼朝肖像

1、鎌倉時代

鎌倉時代(一一八五年頃～一三三三年)は、日本史で幕府が鎌倉に置かれていた時代を指す日本の歴史の時代区分の一つである。

源頼朝が鎌倉に幕府を開いてからの時代で、中国では宋、元の時代に当たる。朝廷と並んで全国統治の中心となった鎌倉幕府が相模国鎌倉に所在したことからこう呼ばれる。本格的な武家政権による統治が開始した時代である。始期については諸説あるが、東国支配権の承認を得た一一八三年説と守護・地頭設置権を認められた一二八五年説が有力視されている。

浄土宗、浄土真宗、日蓮宗などが起って武家と僧侶が権力を振った時代で、禅僧の来朝により、日本と中国両国の禅僧によって禅様が盛行し、その書風は力強く、和様書道界に新風を注いだ。和様と禅様とが並び行われた時代で、文字の美の追求から実用性を重視する変革がなされ、漢字仮名交じり文が一般化された時代でもある。

2、禅様(墨跡)

禅様とは宋代の書風で、中国の禅僧の間に流行した蘇軾、黄庭堅、米芾、張即之などの書を指し、晋唐の規範や伝統から解放された自由剛健なもので、奈良朝以来行われた線の軟らかい王羲之風のものとは全く趣を異にするものである。宋の滅亡後、元が興ったが、禅僧の往来は益々頻繁であった。この禅僧のもたらした中国書法による筆跡を墨跡と呼ぶ。近來では、宋、元時代の他に、江戸時代の黄檗派の禅僧の書風も墨跡と呼ぶのが一般的となっている。

3、和様、宸翰様

和様の諸流派、すなわち世尊寺流、世尊寺流から平安時代末期より藤原忠通に

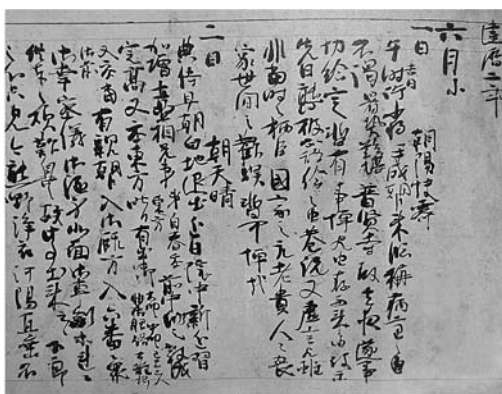
よって分かれた法性寺流、藤原俊成による俊成流、藤原定家による定家様などの書風が確立し、特に法性寺流がこの時代に入り大流行した。また、鎌倉時代以降の天皇家の書風を後世、宸翰様(しんかんよう)と呼んでいる。宸翰様には伏見天皇による伏見院流、後円融天皇による勅筆流、後柏原天皇による後柏原院流などがある。

4、藤原定家

藤原定家(一一六二(応保二年)～一二四一年九月二十六日(仁治二年八月二〇日))は、鎌倉時代初期の公家で歌人。諱は「ていか」と有職読みされることが多い。藤原北家御子左流で藤原俊成の二男。最終官位は正二位権中納言。京極殿または京極中納言と呼ばれた。平安時代末期から鎌倉時代初期という激動期を生き、御子左家の歌道の家としての地位を不動にした。代表的な新古今調の歌人であり、その歌は後世に名高い。俊成の「幽玄」をさらに深化させて「有心(うしん)」をとなえ、後世の歌に極めて大きな影響を残した。二つの勅撰集、『新古今和歌集』、『新撰和歌集』を撰進。『源氏物語』、『土佐日記』などの古典の書写・注釈にも携わった。

『明月記』は、定家が治承四年(一一八〇年)から嘉禎元年(一二三五年)までの五十六年間にわたり克明に記録した日記である。別名照光記と呼ばれる。冷泉家時雨亭文庫に収蔵されており、二〇〇〇年(平成十二年)国宝に指定されている。

『明月記』の名は定家が命名したものはなく、当人は『愚記』と読んでいた。没後、定家の末裔は「中納言入道殿日記」、外部の人々は「定家卿記」の名称を用いていたようであるが、南北朝の頃から『明月記』の名称が用いられるようになった。広橋家記録によれば二条良基の説として『毎月抄』にある。定家が住吉明神参拝の際に神託によつて作成した『明月記』がこの日記であるとの考えが記されている。良基の説を証明するものはないが、当時の日記は公家が公事故実や家職家学の知識を子孫に伝えることを作成目的の一つとしていたことから、定家の日記は定家の奥義書『明月記』という認識が広く行われ、定家末裔を含めてこの呼称が用いられるようになったと考えられている。



明月記

日本書道史

(27)

前田 龍雲

5、藤原為家

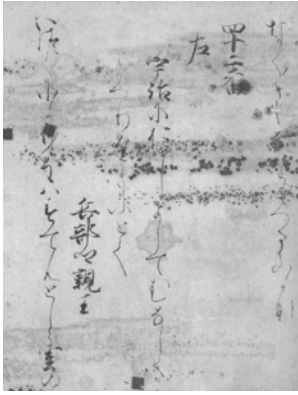
藤原為家（一一八八〜一二七五年）は、鎌倉時代中期の公家・歌人。父は藤原定家。官位は正二位・権大納言。別称は中院禪師・冷泉禪門・民部卿入道。源頼朝が鎌倉に幕府を開いてからの時代で、中国では宋、元の時代に当たる。

一一〇五年（元久二）、母方の祖父藤原実宗邸で元服を行い、伯父西園寺公経の猶子となる。若い頃は蹴鞠に熱中し、同好の順徳天皇に目を掛けられた。ところが一二二一年（承久三）に発生した承久の乱に際して、順徳天皇の佐渡遷幸・配流の供奉者として召されたが、応じなかったという。彼の子孫、特に二条家（御子左嫡流）は和歌とともに鞠道においても重きをなし、飛鳥井流にならぶ御子左流を形成したが、その始まりは為家に求められる。承久の乱の後、鎌倉幕府と親しい養父西園寺公経が朝廷の実権を握ったことで、為家も順調に昇進する。一二二六年（嘉祿二）に参議として公卿に列すると、一二三六年（嘉禎二）権中納言に、一二四一年（仁治二）には、父定家を越える権大納言にまで昇

進した。

為家は後嵯峨院歌壇の中心的な歌人としても活躍。「宝治百首」に参加し、一二五一年（建長三）には『続後撰和歌集』を単独で撰出して、一二五六年（康元元）に出家し、法号を融覚・静真と称した。一二六五年（文永二）には藤原基家など四人で『古今和歌集』を撰進している。晩年は『十六夜日記』を記した阿仏尼と同棲してその子冷泉為相を溺愛し、遺領相続に関して問題を残した。

『新勅撰和歌集』以下の勅撰和歌集に入集。家集に『為家集』『中院詠集』『為家卿千首』、歌論集に『詠歌一体』がある。



伝藤原為家・姫路切

6、道元

道元（一一〇〇〜一二五三年）は、鎌倉時代初期の禅僧。日本曹洞宗の開祖。晩年に希玄という異称も用いた。同宗旨では高祖と尊称される。諡号は、仏性伝東国師、承陽大師。一般には道元禅師と呼ばれる。

出生には不明な点が多いが、内大臣土御門通親の嫡流の出生だと諸説が一致している。定説では京都木幡の松殿山荘で通親と太政大臣松殿基房の娘伊子の子として生まれたとされているが、近年の定説では養父とされている堀川通具の実子とする説が有力になりつつある。また、通親の子、通宗または通光を父親とする説もある。伝記である『建撕記』によれば、三歳で父を、八歳で母を失って、異母兄である堀川通具の養子になった。また、一説によれば両親の死後に母方の叔父である松殿師家（元摂政内大臣）から松殿家の養嗣子にしたいという話があったが、道元が断つたとも言われている。浄土真宗の開祖親鸞とは、互いに生家が公家ということもあり、母方の縁戚にあたり面識があったとする説があるが確証はない。

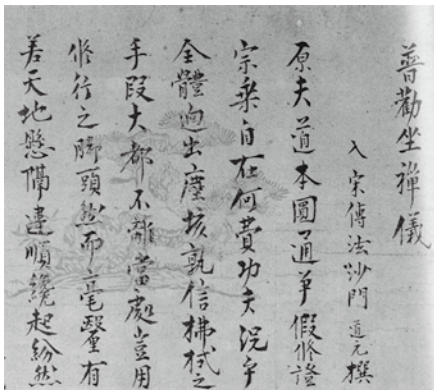
成仏とは一定のレベルに達することで完成するものではなく、たとえ成仏したとしても、さらなる成仏を求めて無限の修行を続けるこそが成仏の本質であり（修証一如）、釈迦に倣い、ただひたすらに坐禅に打ち込むことが最高の修行である（只管打坐）と主張

した。

鎌倉仏教の多くは末法思想を肯定しているが、『正法眼蔵随聞記』には釈迦時代の弟子衆にもすぐれた人ばかりではなかったことを挙げて、末法は方便説に過ぎないとして、末法を否定した。

一二二七年（嘉祿三）に道元が帰国直後、坐禅の教えを広く伝えようとして最初に構想し、三四才のときに京都・深草の興聖寺で書いたのが自筆本『普勸坐禅儀』である。ここには、坐禅の方法と意義が丁寧に書かれており、曹洞宗では、今も坐禅の際に全員で読誦する。

後に、多くの支援者を得たが、他の宗派との争いを避け、「深山幽谷に住んで仏祖の教えを守れ」という師の言葉に従い、越前の山中に永平寺を建立した。



普勸坐禅儀

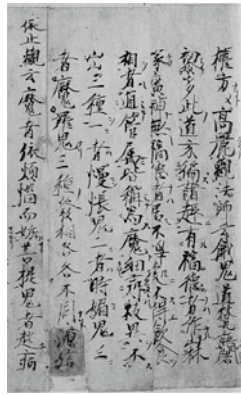
7、親鸞

親鸞(一一七三〜一二六二年)は、鎌倉時代初期の僧で浄土真宗の宗祖。法然を師と仰いでからの生涯に渡り、「真の宗教である浄土宗の教え」を継承し、さらに高めて行く事に力を注いだ。独自の寺院を持たず、各地につつましい念仏道場を設けて教化する形をとった。親鸞の念仏集団の隆盛が、既成の仏教集団や浄土宗他派からの攻撃を受けるなどする中で、宗派としての教義の相違が明確となり、親鸞の没後に宗旨として確立される事になる。浄土真宗の立教開宗の年は、『顕浄土真実教行証文類』(以下、『教行信証』)が完成した寛元五年(一二四七年)とされるが、定められたのは親鸞の没後である。

親鸞が著した浄土真宗の根本聖典である『教行信証』の冒頭に釈尊の出世本懐の経である『大無量寿経が「真実の教」であるとし、阿弥陀如来の本願(四十八願)と、本願によって与えられる名号「南無阿弥陀佛」を浄土門の真実の教え「浄土真宗」である」と示した。

如来の本願によって与えられた名号

「南無阿弥陀仏」をそのまま信受することによって、ただちに浄土へ往生することが決定し、その後は報恩感謝の念仏の生活を営むものとする。このことは名号となつてはたらく「如来の本願力」(他力)によるものであり、我々凡夫のはからい(自力)によるものではないとし、絶対他力を強調する。



教行信証

8、日蓮

日蓮(一二二二年〜一二八二年)は、鎌倉時代の僧。法華経の題目を重んじる諸宗派が宗祖とする。死後に皇室から日蓮大菩薩(後光厳天皇、一三五八年)と立正大師(大正天皇、一九二二年)の諡号を追贈された。『立正安国論』は、日蓮宗を開いた日蓮が文応元年(一二六〇年)に得宗北条時頼に提出するために撰述した文章。日蓮本人

が文永六年(一二六九年)に筆写したとされる本が法華経寺にあり(国宝)、他にも直弟子などによる写本が多数伝わる。更に真言密教批判などを加えた増補本が本圀寺にある。

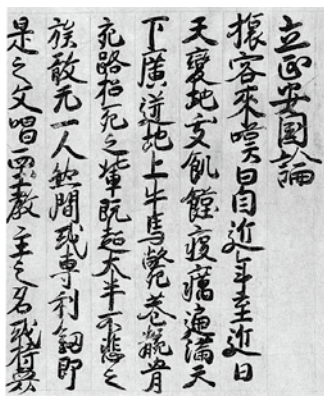
正嘉年間以来、地震・暴風雨・飢饉・疫病などの災害が相次いだ。当時鎌倉にいた日蓮は立正安国論撰述の前後、宗教家としての憂慮から政治・宗教のあるべき姿を当時鎌倉幕府の事実上の最高指導者である北条時頼に提示するために駿河国実相寺に籠つて執筆した。後にこの書を持参して実際に時頼に提出している。

この中で日蓮は災害の原因を人々が正法である法華経を信じずに浄土宗などの邪悪な教えを信じているからであるとして対立宗派を非難し、法華経だけではなく鎮護国家の聖典とされた金光明最勝王経なども引用しながら、このまま浄土宗などを放置すれば国内では内乱、外国からは侵略を受けると唱え、逆に正法である法華経を中心とすれば国家も国民も安泰となると主張した。

この内容はたちまち内外に伝わり、その内容に激昂した浄土宗の宗徒による日蓮襲撃事件を招いた上に、禅宗を

信じていた時頼からも「政治批判」と見なされて、翌年には日蓮が伊豆国に流罪となつた。

時頼没後の文永五年(一二六八年)にはモンゴル帝国から臣従を要求する国書が届けられて元寇の到来に至り、続いて国内では時頼の遺児である執権北条時宗が異母兄時輔を殺害し、朝廷では後深草上皇と龜山天皇の対立の様相を見せ始めるなど、内乱の兆しを思わせる事件が発生した。これを見た日蓮とその信者は立正安国論をこの事態の到来を予知した予言書であると考えられるようになった。日蓮はこれに自信を深め、弘安元年(一二七八年)に改訂を行い(「広本」)、以後も二回、合わせて三回の「国家諫曉」を行うことになる。



立正安国論

日本書道史

(29)

前田 龍雲

七、室町時代

1、室町時代

室町時代は、広義では「室町幕府が存在した時代」に当たり、足利尊氏が一三三六年（建武三年、北朝延元元年）に建武式目を制定し、一三三八年に征夷大將軍に補任されてから、十五代將軍義昭が一五七三年（元龜四年／天正元年）に織田信長によって京都から追放されるまでの二三七年間を指す。

しかし、建武新政を含む最初の約六〇年間を南北朝時代、応仁の乱（一四六七年）または明応の政変（一四九三年）以後の時代を戦国時代と区分して、南北朝合一（一二三九二年）から応仁の乱勃発または明応の政変までの約七十五〜一〇〇年間を狭義の室町時代と区分する場合もある。

一三三六年、後醍醐天皇と対立した足利尊氏が持明院統（北朝）の天皇を擁立し幕府を開いたが、一三九二年、三代將軍義満によって南北朝が統一され、最終的に武家が優位に立った。將軍直轄の軍事力や財政基盤は弱く、中央の幕府が上位に立ち、地域権力たる守護大名がその監督下にありつつも、

両者が相互補完的に政治的・経済的支配を展開した。



足利義満

義満が京都北小路室町に花の御所を造営して以降、歴代將軍を室町殿と呼んだことから、その政權を室町幕府時代を室町時代と呼ぶ。

義満の時代に国内は安定したものの、応仁の乱（一四六七〜七七）ないし明応の政変（一四九二年）以降は動乱の時代（戦国時代）を迎え、それまでの幕府―守護体制・荘園公領制が崩壊するとともに、各地に戦国大名が横行するようになる。

室町時代は、鎌倉時代以前には見られない出自不明の農民・商人層の社会

進出を可能とし、日本史上初めて顔が見える民衆を登場させた時代でもある。旧勢力の没落と新勢力の興隆の時代として捉えることができる（下克上）。戦乱が続く時代だったが、経済面においては農業・工業ともに技術が向上し、生産も増大、内外の流通が盛んになった。初期には倭寇が朝鮮や中国の沿海部を襲った。

2、北山文化と東山文化

室町時代は、義満の時代と義政の時代に特徴的な文化が栄え、それぞれ北山文化・東山文化と呼ばれることがある。南北朝時代の活力が背景にあり、三代將軍義満の時代は中央集権的で公家文化と武家文化の影響や中国文化の影響がある。京都の北山に壮麗な山荘をつくったが、そこに建てられた金閣



の建築様式が、伝統的な寝殿造風と禪宗寺院における禪宗様を折衷したものであり、時代の特徴をよくあらわしている。この時代の文化を北山文化と呼んでいる。



八代將軍義政の時代は庶民的で「侘び・寂び」という禪宗などの影響が強いのが特色といわれる。応仁の乱での京都の荒廃を機に地方伝播し、惣村や都市の発達により成長していた庶民にも文化が浸透していった。茶の湯・能楽・書院造など今日、文化の原型と考えられているものがこの時代に確立された。応仁の乱後、京都の東山に山荘をつくり、そこに祖父義満にならって銀閣を建てた。この時期の文化は、東山山荘に象徴されるところから東山文化と呼ばれる。

3、室町時代の書

室町時代は乱世で、書道は日本・中国（元から明）ともに廃れた。安土桃山時代に入り古筆を愛玩賞味する風潮がおこり、わずかに生氣を保つにとどまる。鎌倉時代から室町時代にかけて、三筆・三跡を祖とする和様が現れているが、最も勢力があったのは、世尊寺流、法性寺流、尊円法親王を祖とする青蓮院流、持明院基春による持明院流の四派である。何れも行成の流れを汲むものであり、また、鎌倉時代の伏見天皇ら諸天皇による宸翰様の後を受けて、この時代の諸天皇も華麗な筆跡を遺している。尊円法親王は伏見天皇の第六皇子で、その青蓮院流は後に御家流と呼ばれ、江戸時代まで日本の書道の中心的書風となった。

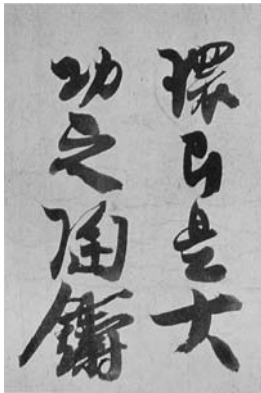
4、尊円法親王

尊円法親王（一二九八年（永仁六年）～一三五六年（正平十一年）延文元年）は、青蓮院第十七世門跡。伏見天皇の第六皇子。母は三善俊衡の娘。初名は守彦親王。尊円入道親王ともよばれる。一三〇八年（延慶元年）に青蓮院に入り、一三二〇年（延慶三年）に親王宣下を受ける。一三二一年（延慶四年）法門に入り、名を尊円と改めて青蓮院門跡に就任した。一三二四年（正和三年）から一三二九年（元徳元年）まで門跡管領を止められたが再び門主となり、一三三一年（元徳三年）には天台



結夏衆僧名

座主に任じられている。この前後四回にわたり天台座主隣、その間四天王寺別当を歴任している。和歌をはじめ世尊寺行房に学び、行房が南朝方として北国の金沢で戦死すると、その弟行尹に学んだ。小野道風・藤原行成などの上代様の書法を研究、それに南宋の張即之の書風を加味し、尊円流または青蓮院流と称される書法を作り出した。



看読真詮榜

5、墨跡

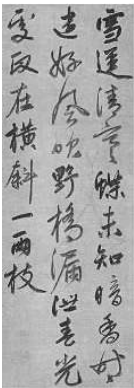
大燈国師（一二八二年（弘安五年）～一三三八年（延元二年）建武四年）は法名を宗峰妙超といい、日本禅宗史に大きな足跡を残した臨済宗の僧である。大徳寺を開いた。大燈国師とは後醍醐天皇から賜った国師号である。スケールの大きな書風は人間像がそのまま顕れたもので、当時より一級のものととして尊重されてきた。



虎林字号

もの。大阪・鴻池家伝来。

雪村友梅（一二九〇年（正応三年）～一三四七年一月十四日（貞和二年十二月二日））は、鎌倉時代末から南北朝時代にかけての臨済宗の禅僧である。幼少の頃、鎌倉に出て建長寺の一山一寧に侍童として仕える。元朝からの帰化僧である一寧から唐語や彼の地の様子を教えられたと思われる。のち比叡山戒壇院で受戒、つづいて京都建仁寺に入門した。



梅花詩

前田 龍雲



一休宗純(一二三九四〜一四八一年)は室町時代の臨済宗大徳寺派の禅僧で、数々の説話のモデルとしても知られる。京都の出生で、後小松天皇のご落胤とする説がある。幼名は、後世史料によると千菊丸。長じて周建の名で呼ばれ狂雲子、瞎驢(かつろ)、夢闍(むけい)などと号した。戒名は宗純で、宗順とも書く。一休とは道号である。

早くから詩才に優れ十三歳の時に作った漢詩『長門春草』、十五歳の時に作った漢詩『春衣宿花』は洛中の評判となり賞賛された。応永十七年(一四一〇年)、十七歳で謙翁宗為の弟子となり戒名を宗純と改める。謙翁は

応永二十一年(一四一四年)に没した。この時、一休は師の遷化によるものかは断定できないが、自殺未遂を起こしている。

応永二十二年(一四一五年)に京都の大徳寺の高僧、華叟宗曇の弟子となる。「洞山三頓の棒」という公案に対し、「有るじより無るじへ帰る一休み雨ふらば降れ風ふかば吹け」と答えたことから華叟より一休の道号を授かる。応永二十七年(一四二〇年)のある夜、カラスの鳴き声を聞いて俄かに大悟する。華叟は印可状を与えようとするが、一休は辞退した。華叟はばか者と笑いながら送り出したという。以後は詩・狂歌・書画と風狂の生活を送った。逸話は数々ある。

○印可の証明書や由来ある文書を火中に投じた。

○男色はもとより仏教の戒律で禁じられていた飲酒・肉食や女犯を行い、盲目の森侍者という側女や岐翁紹禎という実子の弟子がいた。

○朱鞘の木刀を差すなど、風変わりな格好をして街を歩きまわった。

○親交のあった本願寺門主蓮如の留守

中に居室に上がりこみ、蓮如の持念仏の阿弥陀如来像を枕に昼寝をした。その時に帰宅した蓮如上人は「俺の商売道具に何をやる」と言つて、ふたりで大笑いしたという。

○正月に杖の頭に鬮腰をしつらえ、「ご用心、ご用心」と叫びながら練り歩いた。

こうした一見奇抜な言動は中国臨済宗の高僧として知られる普化など唐代の禅者と通じるものがあり、教義の面では禅宗の風狂の精神の表れとされる。と同時に、こうした行動を通して仏教の権威や形骸化を批判・風刺し仏教の伝統化や風化に警鐘を鳴らすものでもあった。彼の禅風は、直筆の法語として『七仏通誡偈』が残されていることから伺える。

この戒律や形式にとられない人間臭い生き方は民衆の共感を呼び、江戸時代に彼をモデルとして一休咄に代表される頓知咄を生み出す元となった。

一休は能筆で知られる。一休が村田珠光の師であるという伝承があり、茶人

の間で墨蹟が極めて珍重された。

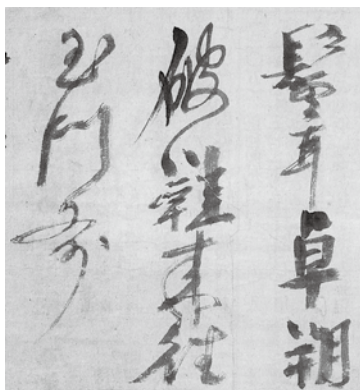
著書(詩集)は『狂雲集』、『続狂雲集』、『自戒集』、『骸骨』など。東山文化を代表する人物でもある。足利義政とその夫人日野富子の幕政を批判したことも知られる。

正長元年(一四二八年)、称光天皇

が男子を残さず崩御し伏見宮家より後花園天皇が迎えられて即位した。後花園天皇の即位には一休の推挙があつたという。

応仁の乱後の文明六年(一四七四年)、後土御門天皇の勅命により大徳寺の住持(第四十七代)に任ぜられ寺には住まなかつたが再興に尽力した。塔頭の真珠庵は一休を開祖として創建された。天皇に親しく接せられ、民衆にも慕われたという。

一四八一年、八十八歳で酬恩庵においてマラリアにより没した。臨終に際し、「死にとうない」と述べたと伝わる。酬恩庵は通称「一休寺」と言い、京都府京田辺市の薪地区にある。康正二年(一四五六年)に荒廃していた妙勝寺を一休が再興したものである。墓は酬恩庵にあり「慈揚塔」と呼ばれる。



偈頌

八、安土桃山時代

1、安土桃山時代

織田信長の居城であった安土城、豊臣秀吉の居城であった伏見城（桃山）から、このように呼ばれる。特に、豊臣家が全国支配を担った後半を桃山時代といい、この時代を中心に栄えた文化を桃山文化と呼ぶ。ただし、桃山の名称は江戸時代になって廃城された伏見城の跡地に桃の木が植えられたことから名付けられたもので、桃山城と呼ばれる城が存在したわけではない。そのため、歴史的経緯を尊重するならば、「伏見時代」の方が適切な呼称となるが、そもそも、安土城は完成からわずか三年余りしか存在しておらず、伏見城（木幡山）も完成から二年後に秀吉が死去するなど、それぞれ在城は短期間であり、これらを時代の呼称に用いること自体が適切ではないという論もある。そのため、近年は「織豊時代」という呼び方も広まっており、「安土大坂時代」や「天正時代」の呼称を提案する人もいる。

安土桃山時代の始期と終期には複数の見解が存在する。始期は、織田信長

が足利義昭を奉じて京都に上洛した永禄十一年（一五六八年）、義昭が京都から放逐されて室町幕府が倒された元亀四年（一五七三年）、安土城の建設が始まった天正四年（一五七六年）とする考えもある。終期は、豊臣秀吉が死去した慶長三年（一五九八年）、関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利した慶長五年（一六〇〇年）、家康が征夷大将軍に任じられ江戸幕府を開いた慶長八年（一六〇三年）などがある。何れにしても、「織田・豊臣の時代」という概念をどこで区分するかの違いではあるが、室町時代、戦国時代と重複してしまうことが、その定義を難しくしている。

2、桃山文化

安土桃山時代には、都市部において豪商と呼ばれる新興商人が成長し、その富を背景にした豪華で大掛かりな文化傾向が見られる。また信長の政策により、仏教勢力の力が中央では弱まり、仏教主義的な作品が減り、代わりに人間中心、現世的な作風が見受けられるようになった。

茶の湯が流行し、唐物の茶道具が珍

重された一方で、それへの反抗としてのわび茶も発達した。大名が茶器を家臣への報奨として渡すようになり、茶会が武將と豪商を結ぶなど、政治にも影響した。

特筆すべき点としては、天文十八年（一五四九年）のフランシスコ・ザビエル来日以来の南蛮貿易によってもたらされた南蛮文化の影響が挙げられる。まだ小規模ではあったが、日本が初めて西洋文化と直接触れ合ったという点で重要である。

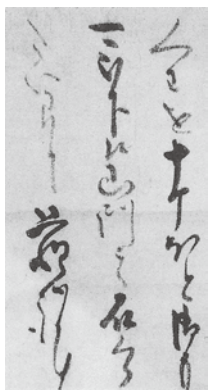
3、茶道と書

室町時代、茶によって精神を修養し、人と交わる礼法が横行した。その立役者が千利休である。

千利休は大永二年（一五三二年）和泉の国堺の商家（屋号、魚屋（ととや））に生まれる。幼名は与四郎。法諱は宗易。居士号は利休。抛筌斎。父は田中与兵衛（田中與兵衛）、母は宝心妙樹。祖父は、足利將軍家の同朋で千阿弥といい、その名をとり、正親町（おおきまち）天皇より許されて、千姓を名乗ったのです。北向道陳・武野紹鷗に茶道を習う。織田信長が堺を直轄地としたときに茶頭として雇われ、のち豊臣秀吉に仕えた。北野大茶会を取り仕切るなど、茶匠として権勢を振るい、秀吉から利休を天下一の茶人と褒め称えられた。ところが天正十九年二月十三日、秀吉は利休に堺への退去を命じ、二十六日には京都に呼び出して切腹を命じる。天正十九年二月二十八日切腹。今日も続く茶道の始祖であり、侘茶の世界を完成させた千利休の書状は数多く残っている。特に晩年、古田織部に宛てたものである。



狩野永徳唐獅子図



千利休

日本書道史

(33)

前田 龍雲

九、江戸時代



徳川家康

1、江戸時代

江戸時代は、日本の歴史において、徳川将軍家によって日本が統治されていた時代である。徳川時代とも言う。この時代の徳川将軍家による政府は、江戸幕府あるいは徳川幕府と呼ぶ。一六〇三年三月二十四日（慶長八年二月十二日）に徳川家康が征夷大將軍に任命されて江戸に幕府を築いてから、一八六八年五月三日（慶応四年／明治元年四月十一日）に江戸城が明治政府軍の手に落ちるまでの、二六五年間を指す。

初期については、関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利した一六〇〇年十月二十一日（慶長五年九月十五日）を始まりとする説もある。終期については、



江戸城

徳川慶喜が大政奉還を明治天皇に上奏した一八六七年十一月九日（慶応三年十月十四日）とする見方や、王政復古の号令によって明治政府樹立を宣言した一八六八年一月三日（慶応三年十二月九日）とする見方もある。徳川家康が征夷大將軍になってからの時代で、中国では清の時代に当たる。この時代は江戸幕府の文教政策によって書道界にも革新の風が起こり、唐様・和様に大きな変化があった。

2、唐様

この時代の墨跡は禪僧の書をいい、大徳寺派・妙心寺派・黄檗派の僧の書で、宋の米芾、元の趙孟頫、明の文徵明・祝允明・董其昌らの書風である。寛永十年（一六三三年）の鎖国令によって中国の書籍・法帖などの輸入がきわめて制限されている中、この黄檗僧たちの書は主として儒者・文人・僧侶などに受け入れられた。黄檗僧の中で隠元隆琦、木庵性瑫、即非如一の三人は特に能書で黄檗の三筆と称された。

墨跡の中国書法は北島雪山に伝授され、雪山は唐様の創始者として活躍した。その書法は江戸の門人細井広沢に伝えられ、唐様の流行を確固たるものにした。『観鷺百譚』など多くの著書を残し、唐様推進の原動力となった。その後、寂庵・池大雅らが継承し、江戸時代末期には幕末の三筆と呼ばれる市河米庵・巻菱湖・貫名崧翁の三人へと展開していった。この三人は武家や儒者に信奉者が多く、特に江戸の市河米庵は諸大名にも門弟があり、その数五千人ともいわれた。

江戸時代中頃から書法の研究が進み、これまでの元・明の書風から晋唐の書風を提唱する者があらわれ、巻菱湖・貫名崧翁らは晋唐派であり、市河米庵などは明清派であった。この二派の流れは明治時代になってからも続き、明治時代の多くの書家に影響を与えていく。

3、和様

江戸時代初期を代表する寛永の三筆（近衛信尹・本阿弥光悦・松花堂昭乗）の書は、前代から継承された御家流を土台としており、彼らの格調高い書風を学ぶ者が多かった。

平安時代以来の書道は上流社会の人々（貴族文化）の間で行われていたが、この時代の書道は一般庶民にまで普及した。これは寺子屋という一般庶民の教育機関が全国に設けられ、その教育の中心が手習いであったことによる。寺子屋では主に御家流が習われた。唐様が儒者や文人趣味を好む学者など特定の範囲で広まったのに対し、和様は公家・武家・庶民を含めた広範囲に広まり、数の上では和様が勝った。

江戸時代中期の和様の代表は、幕府右筆の森尹祥、上代様の復興に努めた近衛家熙、千蔭流を成した加藤千蔭、池大雅などがある。池大雅は後に中国の書の影響を受けて独自の書風を確立した。



桜樹詠文字模様小袖

日本書道史

(34)

前田 龍雲

4、黄檗の三筆

隠元隆琦、木庵性瑫、即非如一の三人は特に能書で、黄檗の三筆と呼ばれ、書風は中国人ならではないものがある。三人には共通した書風があり、隠元の「穩健高尚な書」、木庵の「雄健円成の書」、即非の「奔放闊達な書」と評され「唐風」あるいは「黄檗風の書」として珍重されている。

隠元隆琦（いんげんりゅうき一五九二年～一六七三年）は中国明代末期の臨済宗を代表する費隱通容（ひいんつうよう）の法を受け継ぎ、臨済正伝三十二世となった高僧で、中国福建省福州府福清県の黄檗山萬福寺（古黄檗）の住持であった。その当時、日本からの度重なる招請に応じ、六十三歳の時に弟子二〇名を伴って一六五四年に来朝。後に隠元の弟子となる妙心寺住持の龍溪禪師や後水尾法皇そして徳川幕府の崇敬を得て、宇治に約九万坪の寺地を賜り、一六六一年に禪寺を創建。寺名を中国の自坊と同じ「黄檗山萬福寺」と名付けた。その後、幕府の政策等により、宗派を黄檗宗と改宗し現在に至る。

俗を超えて多くの帰依者を得た。「弘戒法儀」を著し、「黄檗清規」を刊行して叢林の規則を一変するなど、停滞していた日本の禅宗の隆興に偉大な功績を残し、日本禅宗中興の祖師といえるであろう。爾来、隠元のかかげた臨済正宗の大法は、永々脈々と受け継がれ今日に至っている。



隠元隆琦

木庵性瑫（もくあんしょうとう、一六一一年～一六八四年）は福建省泉州府晋江県の出身。勅諡号は慧明国師。十六歳で出家して開元寺の印明の門に入った。

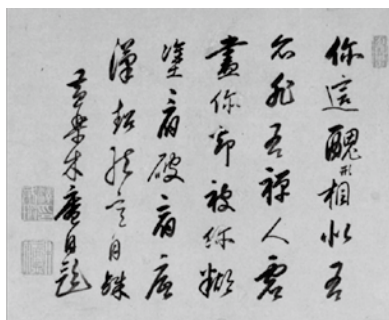
一六二九年に得度し、杭州や天童山、西湖等を歴参して、二十八歳の時には金粟山の費隱通容に参禅した。費隱の許で、副寺・侍者から知賓を経て維那にまでなった。その後も、紹興や天台山等を遍歴。

一六四八年には、天童山の費隱の許に行こうとするが戦乱のために果たせ

ず、中国黄檗山に登り隠元隆琦からその法を受けた。一六五〇年より剣石の太平寺に晋住し、一六五三年には太平寺の住持を即非如一に譲った。

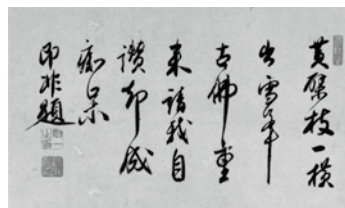
一六五四年に来日していた隠元に招かれ一六五五年に来日、長崎の福濟寺の住持となった。一六六〇年に撰津国の普門寺、一六六一年に黄檗山萬福寺に入り、一六六四年、隠元の法席を継いだ。翌一六六五年、江戸にくんだり四代將軍徳川家綱に謁見し、優遇された。江戸紫雲山瑞聖寺を初め、一〇余寺を開創し、門下も五〇余人に及んだ。一六六九年、將軍より紫衣を賜った。

一六八〇年二月、黄檗山の法席を第三代の慧林性機に譲り、山内の紫雲院に隠退した。一六八四年、病により没した。



木庵性瑫

即非如一（そくひによいつつ、一六六年～一六七一年）は福建省福州府福清県の出身。父を早く失い、十八歳



即非如一

の時に龍山寺の西來の許で出家し、費隱通容が黄檗山に晋住したため十戒を受けて沙弥となった。

一六三七年中国福州黄檗山萬福寺の隠元隆琦に師事して菩薩戒を受戒した。

この頃、山火事を消しているうちに穴に落ち、救出されたときに大悟したという。一六五一年、隠元の法を継いで雪峰の崇聖寺に移った。

一六五七年隠元に招かれて来日し、長崎崇福寺に住み伽藍を整備し、その中興開山となった。一六六三年宇治の萬福寺に移り、法兄の木庵性瑫とともに萬福寺首座となった。最初の黄檗三壇戒では教授阿闍黎の任を務めた。翌一六六四年帰国の途中、豊前国小倉藩主小笠原忠真らに招かれ、一六六五年福聚寺を創建してその開山となった。その後、崇福寺に隠居してそこで没した。

詩を善くし、禅味のある観音・羅漢・蘭竹を画いたが、これは日本の文人画のさきがけとされる。

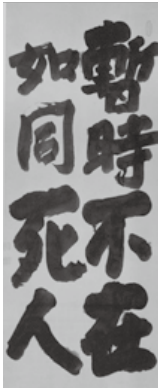
寿ぎに松を圖案化する最も早い作品は、如一が一六六六年に小笠原長真の二十歳の祝賀に送った「松下鶴鹿図」（福聚寺所蔵）とされる。

5、江戸時代の唐様

白隠慧鶴（はくいんえかく、一六八〇〜一七六八年）は、臨済宗中興の祖と称される江戸中期の禅僧である。諡は神機独妙禅師、正宗国師。

駿河国原宿（現・静岡県沼津市原）にあつた長沢家の三男として生まれた白隠は、十五歳で出家して諸国を行脚して修行を重ね、二十四歳の時に鐘の音を聞いて悟りを開くが満足せず、修行を続け、のちに病となるも、内観法を授かつて回復し、信濃（長野県）飯山の正受老人（道鏡慧端）の厳しい指導を受けて、悟りを完成させた。また、禅を行うと起こる禅病を治す治療法を考案し、多くの若い修行僧を救った。

以後は地元に戻って布教を続け、曹洞宗・黄檗宗と比較して衰退していた臨済宗を復興させ、「駿河には過ぎたるものが二つあり、富士のお山に原の白隠」とまでいわれた。現在も、臨済宗十四派は全て白隠を中興としているため、彼の著した「坐禅和讃」を坐禅の折に誦誦する。一七六八年、長年住んだ駿河の原の松蔭寺で八十四歳の生涯を終えた。



白隠慧鶴

北島雪山（きたじま せつざん、一六三六年〜一六九七年）は江戸時代前期の書家・陽明学者。黄檗僧などから文徵明の書法を学び、唐様の書風の

基礎を築いた。

名は三立、雪山・雪参・花隠・蘭隱・花谿子・蘭隱立・蘭晚等と号した。

一六三六年、肥後熊本藩の儒医北島宗宅の次男として生まれる。北島家は、豊後久住の大夫一族志賀能郷を祖に持ち代々三立と名乗った。宗宅はその十八代目にあたり、合志郷村吉に住んだ。

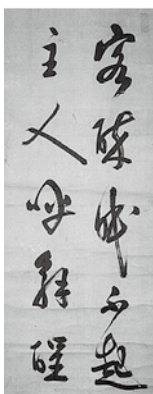
幼い頃に日蓮宗妙永寺住持の日叟上人より書と朱子学を学んだ。藩主の許可を得て父と共にたびたび長崎に遊学。黄檗僧の雪機定然・独立性易・即非如一や儒者愈立德に影響を受け、文徵明や趙孟頫の書法を習得した。のちに張璠の書風を加える。また愈立德に師事して陽明学を修めた。

一六六四年、熊本藩の儒医として仕官。一六六七年には藩主細川綱利に命ぜられて『肥後国郡一統志』編纂に従事。これは江戸時代の最も早い地誌で、中世の肥後を研究する上で貴重な資料となっている。

一六七〇年、江戸幕府による突然の陽明学禁止令によって熊本藩を追放され、京・江戸を流浪。一六七七年、江戸に出て書家・陽明学者として知られ

るようになる。とりわけ唐様の書風は評判となり、雪山流を興した。のちに唐様を江戸に広めた細井広沢などが門人となっている。また林鶯峰・木下順庵・人見卜幽ら諸儒と交わった。

雪山は豪放磊落で大酒豪、奇行が多く、権勢を嫌った。伴蒿蹊『近世畸人伝』巻五にも取り上げられている。これによると貧窮で雨漏りがする家の天井にタライを吊し、その下で書を行っていたという。またあるとき太守より中国で額字を作るための草案として大字の揮毫を依頼されたが、大筆を所有せず簾の萱をもって筆としたという。一六九七年長崎丸山に没し、長崎皓台寺に埋葬される。



北島雪山

日本書道史

(36)

前田 龍雲

細井広沢（一六五八年〜一七三六年）は、江戸時代中期の儒学者・書家・篆刻家。赤穂四十七士の一人、堀部武庸と昵懇で吉良邸討ち入りにも深く係わった人物とされる。名は知慎、字は公謹。通称は次郎太夫。号は広沢。別号に玉川、室号に思胎齋・蕉林庵・奇勝堂などがある。

一六五八年十月八日に遠江国掛川において細井玄佐知治（松平信之の家臣）の次男として生まれた。母は山本氏。十一才の時に父とともに江戸へ入り、朱子学を坂井漸軒に学び、書道を北島雪山に学んだ。ほかに兵学・歌道・天文・算数などあらゆる知識に通じ、博学をもって元禄前期に柳沢吉保に二〇〇石で召抱えられた。剣術を堀内正春に学び、この堀内道場で師範代

の堀部武庸と親しくなった。元禄赤穂事件でも堀部武庸を通じて赤穂一党に協力し、討ち入り口述書の添削をおこない、また『堀部安兵衛日記』の編纂を託された。吉良邸討ち入り計画にかなり深い協力をしており、武庸からの信頼の厚さが伺える。広沢は書道に多大な貢献をしている。

書に関する著述には『観鷺百譚』『紫微字様』『撥鐙真詮』など多数。筆譜に『思胎齋管城二譜』がある。また日本篆刻の先駆とされる初期江戸派のひとりとされる。

蘭谷元定や松浦静軒などに学び、明の唐寅や一元に師事し、羅公権の『秋間戲鏡』などから独学した。また榊原篁洲や池永一峰・今井順齋らとの交流で互いに研鑽した。とりわけ池永一峰とともに正しい篆文の形を世に知らしめようと『篆体異同歌』を著した。また法帖の拓打について新しく正面刷りの方法を考案して『太極帖』を刻している。広沢と子の細井九皋の印を集めた印譜『奇勝堂印譜』があり日本における文人篆刻の先駆けとされている。門弟に関恩恭・柳沢淇園などがいる。

一七三五年十二月二十三日に死去。著書に『国字国訓弁』『紫微字様』がある。墓所は東京都世田谷区等々力の満願寺にあり、この寺に広沢の自刻印が二十数顆伝わっている。

『観鷺百譚』（五巻、一七三五年、細井広沢著）は、享保二〇年（一七三五年）に刊行され、和漢の書道に関する故事

や逸話など百話を集めたもの。唐様の根本原理が紹介され、王羲之・趙孟頫・文徵明の系統が唐様の正系であることが説き、唐様の流行に大きく貢献した。



細井広沢

は、江戸時代の化政文化期の書家、儒学者、文人。江戸神田生れ（異説あり）。鵬齋は六歳にして三井親和より書の手ほどきを受け、町内の飯塚肥山について素読を習った。十四歳の時、井上金峨に入門。才能は弟子の中でも群を抜き、金峨を驚嘆させている。二十三歳で私塾を開き経学や書などを教え、躰寿館においても教鞭を執った。赤坂日枝神社、駿河台、本所横川出村などに居を構え、五〇歳のとき、下谷金杉に移り住んだ。のちに儒学者・書家となる。

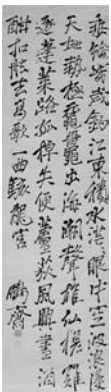
豪放磊落な性質で、その学問は見識が高く、私塾には多くの旗本や御家人の子弟などが入門した。彼の学問は折衷学派に属し、すべての規範は己の中にあり、己を唯一の基準として善悪を判断せよとするものだった。従って、社会的な権威をすべて否定的に捉えていた。

松平定信が老中となり、寛政の改革が始まると幕府正学となった朱子学以外の学問を排斥する「寛政異学の禁」が発布される。山本北山、冢田大室、豊島豊洲、市川鶴鳴とともに「異学の五鬼」とされてしまい、千人以上いたといわれる門下生のほとんどを失った。その後、酒に溺れ貧困に窮するも庶民から「金杉の醉先生」と親しまれた。塾を閉じ五〇歳頃より各地を旅し、多くの文人や粹人らと交流する。

一八〇二年に谷文晁、酒井抱一らとともに常陸国を旅する。この後、この三人は「下谷の三幅対」と呼ばれ、生涯の友となった。

文化五年に妻を亡くし、その悲しみを紛らわすためか、翌年日光を訪れ、信州越後、佐渡を旅した。この間、出雲崎にて良寛出会った。三年にわたる旅費の多くは越後商人がスポンサーとして賄った。

六〇歳で江戸に戻るとその書は大いに人気を博し、人々は競って揮毫を求めた。鵬齋の書は空中に飛翔し飛び回るような独特な書法で知られる。享年七十五歳、今戸称福寺に葬られる。



鵬齋